

2017年度

横浜自然観察の森

# 調査報告

23



(公財) 日本野鳥の会



# 目次

自然の概要 .....	1
-------------	---

## <論文>

2016 年秋～初冬における横浜自然観察の森でのアトリ <i>Fringilla montifringilla</i> とハイタカ <i>Accipiter nisus</i> の出現関係の相関について:大浦晴壽 .....	6
横浜自然観察の森におけるイイジマムシクイ <i>Phylloscopus ijimae</i> の観察記録: 大久保香苗 .....	13
2017 年の横浜自然観察の森のバツタ目昆虫調査:佐藤和樹 .....	16

## <調査記録>

鳥類の冬なわばり数(2017 年度)*: 奴賀俊光まとめ・ボランティア・レンジャーなど職員 .....	24
鳥類ラインセンサス(2017 年度)*: 奴賀俊光・掛下尚一郎 .....	26
月別鳥類出現率記録調査(2017 年度)*: 奴賀俊光・掛下尚一郎まとめ・ボランティア・レンジャーなど職員 .....	29
鳥類標識調査(2017 年度): 清水武彦 他 調査協力員 .....	31
横浜自然観察の森鳥類相調査(2017 年度): 大浦晴壽・板垣昭平・石川裕一・岡田 昇・加藤みほ・齋藤芳雄・佐々木祥仁・武川怜史・ 鳥山憲一・廣瀬康一・平野貞雄 .....	34
横浜自然観察の森での野鳥の足環観察回収事例報告: 石川裕一・大浦晴壽 .....	35
横浜自然観察の森に出現した草地の鳥類相に及ぼした影響: 大浦晴壽 .....	39
横浜自然観察の森でのアカハラダカ <i>Accipiter soloensis</i> の初記録: 大浦晴壽・岡田 昇・廣瀬康一 .....	43
横浜自然観察の森でのガビチヨウ <i>Garrulax canorus</i> の増殖状況調査: 大浦晴壽 .....	46
水辺の生きもの調査(2017 年度)*: 奴賀俊光・掛下尚一郎 .....	48
水辺の調査(2017 年度)～一般参加者と共に行った水生生物調査～: 奴賀俊光・尾崎理恵・大久保香苗・山岸洋樹 .....	51

水生ホタル類成虫の発生数調査(2017 年度)*: 奴賀俊光・中里幹久	56
横浜自然観察の森のチョウ・トンボ生息調査(2017 年度): 平野貞雄・板垣昭平・石川裕一・大浦晴壽・岡田 昇・佐々木祥仁・廣瀬康一・加藤みほ・ 鳥山憲一・齋藤芳雄・武川怜史	63
春季に活動するヤンマ科 2 種の調査: 梅田孝・渡利純也	66
草地のバッタ類調査(2017 年度)*: 掛下尚一郎・大久保香苗・奴賀俊光	68
クツワムシ分布調査(2017 年度): 掛下尚一郎	72
横浜自然観察の森内のアカガエル卵塊数調査(2018): 篠塚 理・杉崎泰章・布能雄二・大沢哲也	77
赤外線カメラ撮影による林内の動物調査(2016 年度): 渡部克哉・藤田 薫・篠原由紀子・石塚康彦	82
台湾リス個体数変化調査(2017 年度)*: 奴賀俊光	85
アライグマ(特定外来生物)の防除(2017 年度): 掛下尚一郎・奴賀俊光・横浜市環境創造局公園緑地部動物園課・同みどりアップ推進課・ 横浜自然観察の森友の会等の有志ボランティア	87
管理による生物多様性への影響調査: 岩知道優樹・内田圭・佐々木雄大	90
都市化が枯死木依存性節足動物群集に及ぼす影響: 宮崎 怜	93
環境写真記録調査(2017 年度)*: 奴賀俊光	97
希少植物調査～シラン原生地の選択的除草の効果～(2017 年度)*: 掛下尚一郎・奴賀俊光・佐々木美雪	100
2017 年度炭焼き調査報告: 片岡 章・小島正彦・谷垣 勝	104
木炭活用法の研究 -和鋼製造の主材料としての試み-: 関根和彦	111
「野草の調査と保護」が除去した植物(2017 年度): 篠原由紀子・上原明子・佐々木美雪・八田文子・藤田剛・山路智恵子	121
自然情報収集調査(2017 年度)*: 奴賀俊光・山岸洋樹・来園者・ボランティア・レンジャーなど職員	123
横浜自然観察の森友の会 会員動向調査(2017 年度): 山口博一	124
自然観察センター入館者数(2017 年度)*: 掛下尚一郎・奴賀俊光	128
トレイルランニング大会における追い越し・すれ違いの状況(第 3 報): 掛下尚一郎	131

## <生物リスト>

鳥類ラインセンサス調査での出現種と月ごとの平均個体数(2017 年度)\*:

掛下尚一郎・奴賀俊光 .....	135
月別鳥類出現率(2017年度)*:掛下尚一郎・奴賀俊光 .....	136
2017年度 上期鳥類相調査結果一覧:	
大浦晴壽・板垣昭平・石川裕一・岡田 昇・加藤みほ・齋藤芳雄・佐々木祥仁・武川怜史・ 鳥山憲一・廣瀬康一・平野貞雄 .....	138
2017年度 下期鳥類相調査結果一覧:	
大浦晴壽・石川裕一・板垣昭平・岡田 昇・加藤みほ・齋藤芳雄・佐々木祥仁・武川怜史・ 鳥山憲一・廣瀬康一・平野貞雄 .....	154
横浜自然観察の森で観察されたチョウ:	
平野貞雄・板垣昭平・石川裕一・大浦晴壽・岡田 昇・佐々木祥仁・廣瀬康一・加藤みほ・ 鳥山憲一・齋藤芳雄・武川怜史 .....	168
横浜自然観察の森で観察されたトンボ:	
平野貞雄・板垣昭平・石川裕一・大浦晴壽・岡田 昇・佐々木祥仁・廣瀬康一・加藤みほ・ 鳥山憲一・齋藤芳雄・武川怜史 .....	169
2017年度 チョウ・トンボ調査結果(月別):	
平野貞雄・板垣昭平・石川裕一・大浦晴壽・岡田 昇・佐々木祥仁・廣瀬康一・加藤みほ・ 鳥山憲一・齋藤芳雄・武川怜史 .....	170
2017年度 チョウ・トンボ調査結果(場所別):	
平野貞雄・板垣昭平・石川裕一・大浦晴壽・岡田 昇・佐々木祥仁・廣瀬康一・加藤みほ・ 鳥山憲一・齋藤芳雄・武川怜史 .....	172
「野草の調査と保護」の自然情報提出記録(2017年度):	
篠原由紀子・上原明子・佐々木美雪・八田文子・藤田剛・山路智恵子 .....	174

## ＜投稿される方・引用される方へ＞

投稿される方へ .....	185
「かんたんな報告」の書き方 .....	185
「くわしい報告」の書き方 .....	188
本調査報告書を利用・引用される方へ .....	189

\* を付した報文は、「2017年度横浜自然観察の森環境調査報告書((公財)日本野鳥の会)」から、委託主の横浜市環境創造局みどりアップ推進課の許可を得て引用したものです。



# 自然の概要

古南幸弘

## 1. 地理的位置

横浜自然観察の森は、多摩丘陵から三浦半島に続く多摩・三浦丘陵群(通称「いるか丘陵」)の半ばに位置し、横浜市の南端、三浦半島の北端にあたる。面積 45.3ha の敷地の東側と西側は横浜横須賀道路と環状4号線により区切られ、北側を住宅地に囲まれ、北東側は4つの市民の森(瀬上、氷取沢、釜利谷、金沢)に連なっている。横浜自然観察の森は、周囲の市民の森等の緑地と共に、円海山・北鎌倉近郊緑地保全地区(面積 1,096ha)に指定されている。南側は鎌倉市の歴史的風土保存区域や逗子市の池子の森とつながっており、これらを含めると面積約 3,000ha の緑地が続いている。この緑地は、神奈川県東部では随一の大規模緑地である。

## 2. 地形・地質・土壌

標高は 50～150m、地形は山地性の丘陵地で、急峻で起伏に富む。園内に境川水系の柏尾川の支流であるいたち川の源流の一つがあり、これにより刻まれた谷が敷地を東西に分けている。東側には小溪谷状の入り組んだ支谷が発達する。西側は過去の開発により、平坦な部分が造成されている。

地質は野島層を基盤としている。これは第三紀鮮新世末期に海底に堆積した、パミスやスコリアなどの火山噴出物を多量に含む、凝灰質な砂質泥岩や泥質砂岩などからなる上総層群のうちの一つである。この上をローム層が不整合に覆っている。

土壌は褐色森林土に分類される。丘頂部には土壌の厚い堆積が見られるが、斜面では土壌が流出しやすく、場所によっては基盤が露出し、植物の生育にはきびしい条件となっている。広場部分は過去に造成のために表土がはがされ、その後ほとんど堆積していない。



図：概要図

### 3. 植生・植物相（開園以来、維管束植物 900 種以上を確認）

気候帯は暖温帯に属し、極相は照葉樹林(シイタブ林)であるが、現在は断片的に残存するのみで、森林の大部分は落葉広葉樹の二次林(ヤマザクラ林、コナラ林、ミズキ林、イロハモミジケヤキ林等)となっている。スギ林、ヒノキ林、モウソウチク林といった人工林も小面積見られる。照葉樹林帯としては北部に位置することもあって、高木、低木、林床植物ともに構成種数はそれほど多くないが、林床には数種のラン科植物も見られる。基盤岩上にあるコナラ林と混交林の林床に、山地性のカントウカンアオイ、スハマソウが隔離的に分布する。低温の地下水の浸潤する溪谷内では、ウワバミンウ、ヤブデマリ等、冷温帯に属する種が生育する。

崖上には多湿を好むケイワタバコの群落が見られる。地下水のしみ出す凝灰質泥岩上の小湿地ではシランの群落が見られる。

広場や草地は過去の造成の影響を受けている個所がほとんどで、ススキ群落、シバ草地等が草刈りの管理により成立しているが、元々の植生が残存していると思われる個所もあり、シラン等の草地性希少種も少数見られる。ミズキの谷の池、水鳥の池、ヘイケボタルの湿地は施設整備時に環境創出のために造成された湿地で、栄区周辺や県内の湿地から約 35 種の水生植物を移植している。

### 4. 動物相

#### ①脊椎動物（約 180 種の在来種を確認）

鳥類はこれまでに 157 種の在来種が記録されており、このうち約 20 種が園内、または周辺で繁殖している。この中には都市周辺では少なくなったフクロウやホトトギス、カワセミ等が含まれている。渡り鳥の中継地としての価値も高く、1987 年には日本で



初めてウタツグミの渡来が観察された。哺乳類ではタヌキ、イタチ、ノウサギ等の中型種、アズマモグラ、アカネズミ等の小型種が生息する。爬虫類はニホンマムシ等のヘビ類やニホンカナヘビなど、両生類ではヤマアカガエルなどのカエル類が生息する。魚類はモツゴ、アブラハヤ等が記録されている。

外来種として、コジュケイ、ガビチョウ等(鳥類)、タイワンリス、アライグマ、ハクビシン等(哺乳類)、ウシガエル(両生類)等が生息しており、一部の種類は数が増えている。

## ②昆虫 (2,453 種を確認)

三浦半島と共通する暖地性、海洋性の種が多いが、北部の多摩丘陵と共通する山地性の種も見られ、多彩な昆虫相を形成している。暖地帯性種では、クチキコオロギ、ズビロキマワリモドキ等の分布の北限に近いと考えられる。山地性種ではウシカメムシ、ヤツメカミキリ等が観察されている。樹林地にはアカシジミ等の低地落葉樹林性の種が生息、流水には都市開発で激減したゲンジボタルやアサヒナカワトンボも見られる。開園時に創出された湿地には止水性のトンボ類や、近隣の生息地から移入放流したヘイケボタルが増えている。草地は人為的な植生や草丈の管理により、様々なバッタ目が生息しており、カヤヒバリ、エゾツユムシ、カヤキリ、の生息は分布上注目される。ススキ草地にはジャノメチョウが多く見られる。



# 論文

## 2016 年秋～初冬における横浜自然観察の森でのアトリ *Fringilla montifringilla* とハイタカ *Accipiter nisus* の出現関係の相関について

大浦晴壽<sup>1</sup>

### はじめに

著者は 1997 年の大晦日に初めて横浜自然観察の森を訪れて以来、その豊かな自然に魅せられ、野鳥観察を続けている。2016 年の 10 月 18 日にシーズン初認された冬鳥アトリ Brambling *Fringilla montifringilla* は例年以上の数(最大数百羽)かつ高頻度でその後確認され続けた。この森でこれ程多くのアトリの確認は、著者のそれまでの 9 年間での観察では初めての経験であった。また小鳥を多く獲物とするハイタカ Sparrowhawk *Accipiter nisus* はこの森では毎年秋から冬に観察される猛禽だが、2016 年度のシーズンには特に高頻度で観察でき、アトリとハイタカの出現には何らかの相関関係があるのではないかと感じられた為、両種の観察結果に基づき、相関係数を算出し検討したので、その結果につき以下に報告する。

### 方法

横浜自然観察の森のほぼ全域を歩き野鳥観察をした。年間 250～300 日程度、朝から昼前頃まで平均 4 時間ほど観察し、種名、性別、羽数、時刻、場所、行動、鳴き声など判別できる限りノートに記入した。観察では見通しの良い関谷奥見晴台(北緯 35° 34' 35" 東経 139° 58' 90")には 1～3 時間/日ほど滞在し、特に出現した猛禽類についてはそのほとんどについて、目視に加え写真撮影により種を同定した。特にハイタカについては「フィールドガイド日本の猛禽類 vol.03 ハイタカ」(渡辺ほか 2015)などを参考に用いた。アトリやシメ Hawfinch *Coccothraustes coccothraustes* の同定は似た外観の種がこの季節にこの森におらず、目視で比較的容易に識別できたが、飛翔中の発見であれば可能な限り写真撮影して同定した。

出現した野鳥の種毎の確認率は、10 日観察し、内 5 日でその種が園内で一羽でも確認できれば、確認率 50%として算出した。

また、出現したハイタカの羽数は一度視界から数秒以上消えその飛行軌跡に連続性が確認できず、その後再出現すればそれもカウントし、延べ出現羽数として日毎に整理した。

アトリなどの羽数は、少ない場合は容易にカウントできたが、群れでの飛翔時にはある単位面積の羽数を数え、群れ全体の面積を単位面積で割った数を数えた羽数に掛けて求めた。群れの部分毎に厚みも違ふし、単位面積も羽数も概数、全体面積も目視のおおよその数値であるので当然大きな群れの羽数は概数となる。

ハイタカは 2016 年秋には 10 月 16 日に初認され、アトリは 10 月 18 日に初認された。その後アトリの大きな群れが最後に観察できた 12 月 13 日までの期間を相関関係検討期間とし、2 種の出現の相関関係を検討する事とした。

---

<sup>1</sup> :横浜自然観察の森友の会

## 結果

アトリとハイタカの出現につきその相関を考えるに当たり、今回ハイタカ以外に 2016 年度にアトリ確認率の増大に呼応するように、その出現率に過去3年間及び 2017 年度と比べ変化があった猛禽があるのかどうか確認してみた。アトリの様な小鳥類を多く獲物としていると考えられる、アトリ来訪時期にある程度この森で観察できる猛禽類は、ハイタカ以外にオオタカ、ツミ、ハヤブサそしてチョウゲンボウの4種がある。

FIG.1 に示した様に、ハイタカ以外に2016 年度下期にアトリ出現率増大に応じてその出現率が特異に変化した猛禽類はいない。

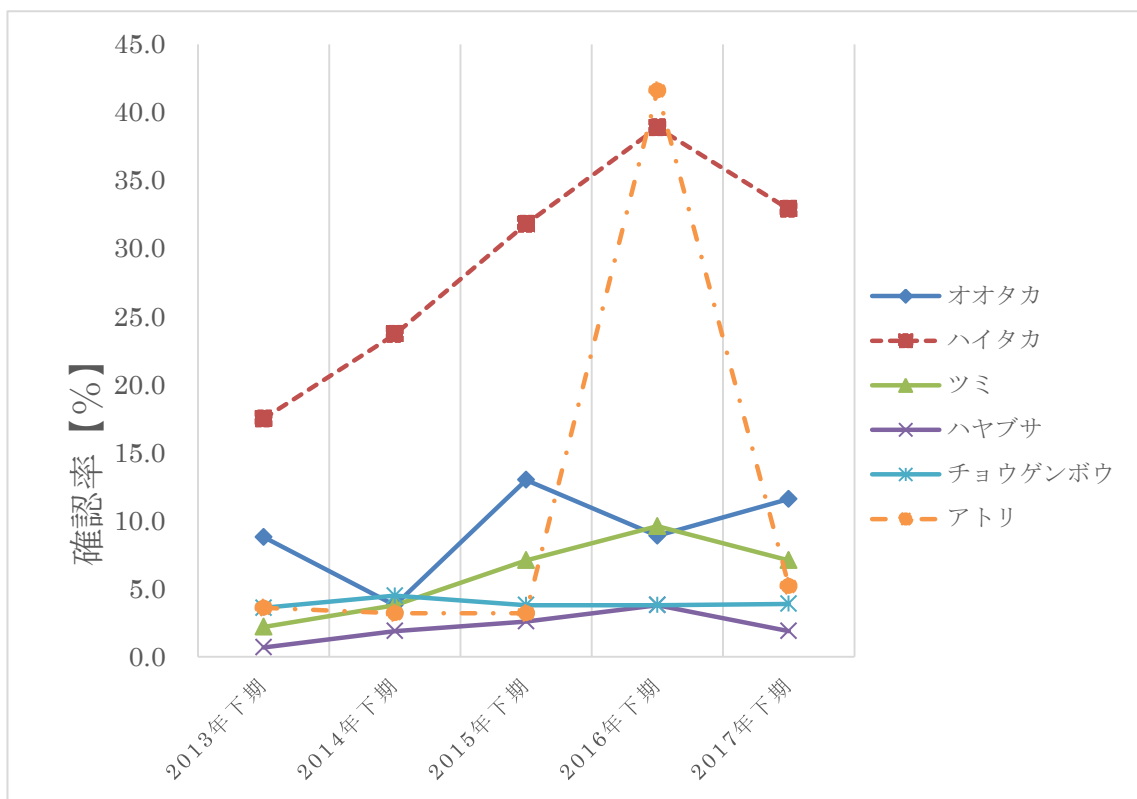


FIG. 1. アトリ及び猛禽類 5 種の 5 年間下期確認率推移

ハイタカは 2013 年度下期以降継続的に確認率が上昇しており、2016 年度下期には確認率が 38.5%と最高になっている。

次に、2016 年度下期のアトリとハイタカの相関を考える際、さらに考えるべきは、アトリ以外の獲物(小鳥)の影響を考慮する必要があるかどうかである。

留鳥は通年この森にいるので 2016 年度のハイタカの特異的な出現に影響は無いと思える。秋以降にこの森を訪れる野鳥で他にハイタカの出現に影響を及ぼす可能性のある種を7種リストアップしてそれぞれの出現羽数を観察日毎に整理し、アトリ・ハイタカが頻度高く観察できた先述した相関関係検討期間(2016 年 10 月 16 日～12 月 13 日)中の確認率をハイタカのそれらと並べ整理してみた(Table 1)。

Table1 ハイタカと野鳥7種の出現状況まとめ								
年月日	延べ出現数	延べ出現概数	延べ出現概数	延べ出現概数	延べ出現概数	延べ出現概数	延べ出現概数	延べ出現概数
20161016	1							
1018		1						
1019		1						
1020		25	2					
1021			13					
1022		30	2		20			
1023	1	30	1					
1024	2	3	7		5			
1025		2						
1026					3			
1027	1	30	4			1		
1028			5					
1029			10					
1030	2	15	15					
1031	1	15	35					
1102	1	370	13					
1103	1	10	5	1	1			
1104	2	400	5	5		12		
1105	3	70	1		3	6		
1106	18	180	4	2				
1107	13	2		3	5			
1108	9	10	4	2	2	4		
1109	1	25	1	5				
1110	4	200	8	1				
1115			12				1	5
1116	1	40	2	12				
1117	4	12	1	4		1	1	3
1118	1	30	5	23	5	3	10	
1120	1	50	15	2			5	
1121	1	60	6	6			10	
1122	1	120	3				10	
1123	3	330	10	11		1	5	2
1125	1	40	13	2		1	5	
1126	3	230	5	2			5	
1127	1	100	27	15		1	6	
1128	1	20	13			1	3	1
1129	1	70	5	9			2	
1130	6		29	4			2	
1202	8	30	2	53			9	5
1203	3	50	1	10		1	1	
1204	1	50	11			1	2	
1205	2	10	21			1		1
1206	2	50	11	30			3	
1207		3	38	4		3	2	
1208		10	12				5	
1209		1	1			1		
1210		10	3	10		3	1	
1211	2	55	26	2		1	5	
1213	1	40	3			2	4	2
観察日数	総羽数	総羽数	総羽数	総羽数	総羽数	総羽数	総羽数	総羽数
49	104	2830	410	218	44	44	97	19
確認日数	35	42	43	24	8	18	22	7
確認率	71.4%	85.7%	87.8%	49.0%	16.3%	36.7%	44.9%	14.3%

この期間中のアトリの総延べ出現羽数は約 2900 羽、ハイタカは 100 羽強であった。またこの期間中の観察日は 49 日あったが、アトリ、ハイタカのこの期間中の確認率はそれぞれ 85.7%、71.4%であった。下期通してのアトリの確認率は 39.5%、ハイタカの確認率は FIG. 1 に示した 38.9%であったので、2016 年はこの期間中に出現が集中していた事が分かる。

アトリの出現率は各年度下期の数値で、2013 年度 3.6%、2014 年度 3.2%、2015 年度 3.2%、2017 年度 5.2%であったので、2016 年度下期の 41.6%はこれまでにない高い数値であった。

## 論議

先述したように2016年10月からのアトリの群れのこれまで経験の無い高頻度の出現とハイタカの出現には何か相関関係があると直感的に感じたが、アトリ以外のハイタカの餌となる可能性がある小鳥の影響はどうであるのか、Table 1の観察結果も参考にして以下に論議してみる。

ツグミ:ハイタカが多く確認され始めた10月中旬にはまだこの森で確認されず、飛来したのは11月に入ってからであった事。何より飛来の羽数が少ない事によりハイタカ出現への影響は除外できると考える。

シロハラ:この森での定着期には下敷を好んでおり、ハイタカの獲物となりにくいと思えるので除外。Table 1に記載は無いが、アオジ、クロジも同様な行動性向があり除外できる。

マヒワ、ウソ、イカル:飛来数が少なく、確認率も低い。ウソ、イカルについては飛来が11月中旬と遅く、除外できる。

シメ:ほぼ例年通りの飛来で、2016年に特異的な動向が観察されなかったため、ハイタカの2016年の特異的な動きに影響はないと思えた。またシメは高確認率の種ではあるが、Table 1の期間中のシメの確認率は85.7%であり、2016年度下期通期の確認率84.5%と比較し、ほぼ同等であり、特にアトリ・ハイタカと足並みを合わせて出現していたのではないと判断され、ハイタカの出現に影響はないと判断した。

従って以下はアトリとハイタカの出現の相関に絞って論議する。アトリとハイタカのTable 1で示した観察日毎の延べ出現羽数をFIG. 2の様にグラフ化してみた。

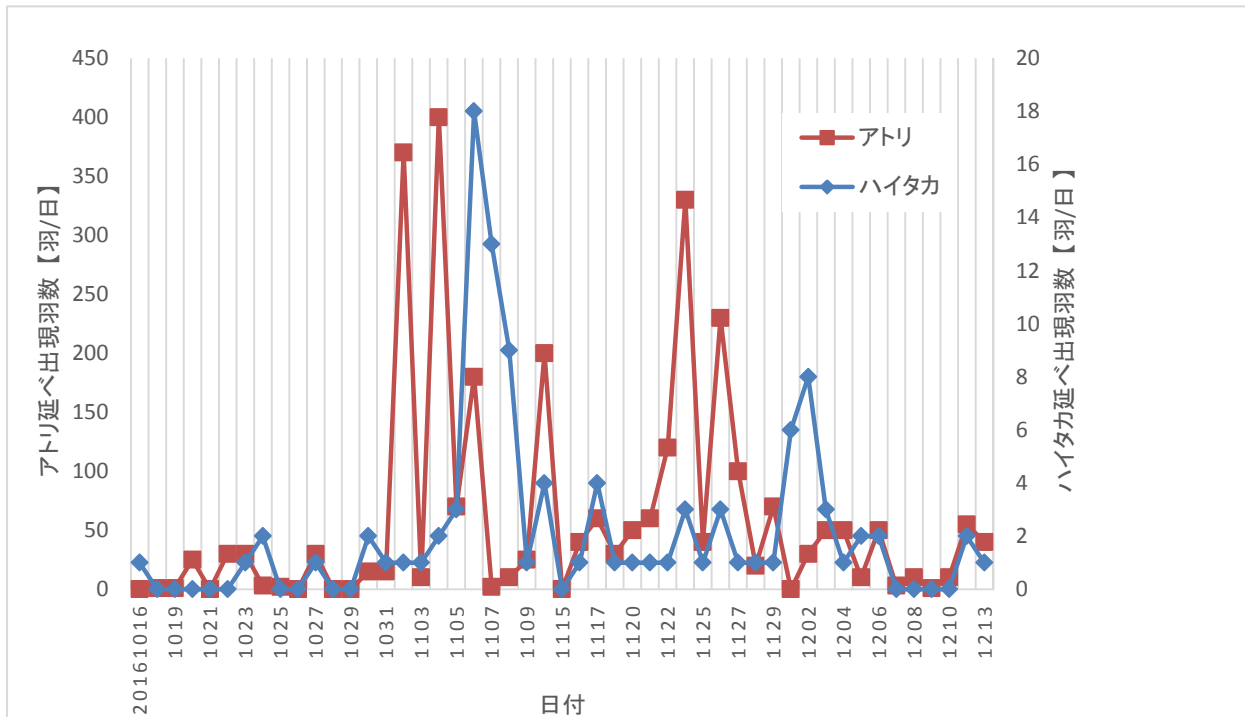


FIG. 2. 2016年秋～初冬アトリ・ハイタカ出現状況

FIG. 2を見るとアトリとハイタカの出現数のピークの日付には微妙なずれが認められるものの何らかの相関関係がある様に感じられる。そこで日付毎のアトリとハイタカの延べ出現羽数をそのまま Excel のCORREL 関数に入力し、相関係数を求めてみると、0.176と得られた。相関係数0.0～0.2の範囲では相関関係が認められないので、アトリとハイタカの出現は予想と異なり相互に無関係となった。

しかし、FIG.2をよく見ると前述したように両種の延べ出現羽数のピークにずれがある様に見える。つま

りハイタカのピークがアトリのピークより何観察日か後ろに位置している様に見える。従って Table 1 に示したアトリの観察日の結果を 3~5 日後ろにずらしてハイタカの結果と合わせ、それぞれの相関係数を求めてみた。具体的には3観察日後ろにずらすとは 10 月 16 日のアトリの延べ出現羽数を 10 月 20 日のハイタカの延べ出現羽数に合わせ、以下順次同様に合わせ、最後は 12 月 13 日のハイタカの延べ出現羽数に 12 月 9 日のアトリの延べ出現羽数を合わせて相関係数を求める。結果は、

3 観察日ずらすと 相関係数=0.294

4 観察日ずらすと =0.568

5 観察日ずらすと =0.220

となる。つまり、統計学的に相関係数 0.4 以上が相関関係の認められる範囲なので、4 観察日アトリの観察結果を後ろにずらしてハイタカのそれとマッチングすると相互の相関関係が認められたのである。

この事は、ハイタカの出現のピークがアトリのピークより4観察日遅れて現れている事を示しているのではないだろうか。私見では 4 観察日という数値には大きな意味はなく、重要なのはアトリの出現の山の後にハイタカの出現の山が来ている、つまり観察データに基づけば、ハイタカがアトリの群れを追っている事を示している様に解釈できる事にある。

残念ながら実際にハイタカがアトリを襲うなり、アトリの群れを追うなりしている場面をこれまで観察できていない。しかし、調べてみるとハイタカはアトリを獲物としている事が分かった。

先に「フィールドガイド日本の猛禽類 vol. 03 ハイタカ」をハイタカ識別の参考に用いた、と言及したが、そもそもこの本の表紙にはアトリを空中で捕獲したハイタカのイラストが描かれている。また、東京新聞 TOKYOweb2016 年 3 月 24 日には「ハイタカ(灰鷹)アトリを捕獲」との記事があり、栃木県鹿沼市大和田町の黒川でアトリを空中で掴んだハイタカが写真付きで掲載されている(写真・文:堀内洋助氏)。

「The SPARROWHAWK」(Newton 2010)には著者の Newton 氏の調査地がアトリの訪れない南部スコットランドであった事により、アトリに関し直接的言及は無いが、ズアオアトリ *Chaffinch Fringilla coelebs* が南部スコットランドのみならずヨーロッパ各地でハイタカの主要な獲物となっている事が記載されている。アトリとズアオアトリは同じアトリ科の鳥で体色も体重(19~23g)も非常に似ている事から、日本でアトリがハイタカの獲物となっている事は確実と思われる。

以上、Table 1、FIG. 2 の結果に基づく論議から 2016 年秋からこの森で頻繁に観察できたアトリの群れを、複数のハイタカが追尾していた事がある程度明らかにできたと考える。

では、2016 年初冬の 12 月中旬に大きなアトリの群れがこの森を去った後のハイタカの動きはどうであったのか、以下に論議したい。

大きなアトリの群れが観察されなくなった 12 月 14 日から 2017 年 3 月 31 日まで 97 日の観察を行い、アトリとハイタカの確認率はそれぞれ 20.6%、26.8%であった。

アトリの確認率は群れが去ったとはいえこの期間でも依然として例年と比べ高いが、そのほとんどが 1 羽、最大でも数羽の確認である。確認されたこの森での場所も、狭い範囲に限られており、群れから離れこの森に定着した少数の個体を繰り返し確認した結果例年に比べれば高い確認率となった、と考えられる。

ハイタカはアトリの群れが去った後は日に複数回の確認も激減し、感覚的には寂しい限りとなった。従ってハイタカの確認率は大幅に下がったと感じていたが、意外にもデータを整理してみると 2015 年度下期並みの確認率であった。これはアトリの群れが去った事によりハイタカを多くこの森に引き寄せる獲物



が無くなり、前年並みに戻った(地付きのハイタカのみになった?)事を示していると推察している。(この森に残留した少数のアトリでは多くのハイタカを誘引できない事は感覚的であるが明らかと思える。)

周辺地域の情報によれば、この森以外の横浜市内、神奈川県内、東京都内に2016年12月中旬以降もかなりな数のアトリの群れが観察されており、一時はこの森に誘引されたハイタカがそちらの群れを追尾した事が2016年12月14日以降のハイタカ確認率が、アトリの大きな群れの観察されなかった2015年度並みに抑えられた要因かもしれない。以下は私見だが、FIG. 1に示した様に2015年度下期のハイタカの確認率がそれ以前の数値より高くなっているのは、この年にアトリの大群が北関東に飛来した事と関連があるかもしれない(平野 2016)。この年はアトリの群れは北関東で止まってしまい、神奈川県を含む南関東には飛来していないのだが、それでもハイタカの動きはある程度は刺激され、それ以前の年に比べこの森でも30%程度の確認率となったのではないか。アトリの群れが去った2016年度12月14日以降のハイタカ確認率は前述の様に26.8%であったが、この数値が北関東にアトリの群れが飛来していた2015年度下期の数値と近似している理由はこの辺りにあるのではないかと考えられる。

また2017年度下期にはアトリの大きな群れの飛来は認められず、大きく低下すると予想していたハイタカの確認率は32.9%とさほど低下しなかった。この理由はこの森に出現したピクニック広場の草地にある様である。この草地に定着したスズメ、ホオジロなどを狙い少数のハイタカが草地周辺で継続的に観察された事が例年以上に確認率を押し上げた様に思える(この新たに出現した草地の効果については大浦(2018)を参照)。しかしその数は僅かであり、ハイタカを日に数羽以上見る事は無く、確認率的な低下は小さくとも、出現した総羽数は2016年度下期の総観察羽数(2016年11月6日には1日に18羽観察)に比べ格段に低下していた事を付記したい。

### 謝辞

著者は日々この森に入り、目に入る鳥を区別する事なく、自然体で可能な限りの記録を残すよう努めている。その観察の中で、著者の所属する横浜自然観察の森友の会カワセミファンクラブの仲間達が写真撮影などによって著者の観察の至らない所を補完頂いている。これらの成果をまとめ、横浜自然観察の森調査報告(大浦ら 2014, 2015, 2016)の中に収載しているが、これらの中から要点を抽出し、今回報告の一部に活用した。参考文献に記し、改めて協力頂いた仲間たちに感謝申し上げます。また2016年度のアトリ・ハイタカの特異的な出現に際しての観察では、岡田 昇、廣瀬康一の両氏に特にご助力頂いた事を記し、感謝申し上げます。

横浜自然観察の森自然観察センターのチーフレンジャーであった古南幸弘氏(現 春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター)にはIan Newton氏の名著をご紹介頂いた。

### 参考文献

- Newton, I. 2010. print-on-demand edition. The SPARROWHAWK. T & AD Poyser, Great Britain.
- 大浦晴壽・板垣昭平・加藤みほ・佐々木祥仁・鳥山憲一・平野貞夫・渡辺美夫. 2014. 横浜自然観察の森鳥類相調査. 横浜自然観察の森調査報告 19, p40, p105-126.
- 大浦晴壽・板垣昭平・加藤みほ・齋藤芳雄・佐々木祥仁・鳥山憲一・廣瀬康一・平野貞夫・渡辺美夫. 2015. 横浜自然観察の森鳥類相調査(2014年度). 横浜自然観察の森調査報告 20, p28, p115-138.

- 大浦晴壽・板垣昭平・加藤みほ・齋藤芳雄・佐々木祥仁・鳥山憲一・廣瀬康一・平野貞夫・渡辺美夫.  
2016. 横浜自然観察の森鳥類相調査(2015 年度). 横浜自然観察の森調査報告 21, p28,  
p102-128.
- 大浦晴壽. 2018. 横浜自然観察の森に出現した草地の鳥類相に及ぼした影響. 横浜自然観察の森  
調査報告 23, p38-41.
- 平野敏明. 2016. アトリの大群は、今冬もやって来るのか?. Birder 12 月号 p24-25.
- 渡辺靖夫・伊関文隆・越山洋三・先崎啓究. 2015. フィールドガイド日本の猛禽類 vol. 03 ハイタカ.  
フィールドデータ, 岡山県赤磐市.

横浜自然観察の森におけるイイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* の観察記録大久保香苗<sup>1</sup>Kanae OKUBO : Observation record of Ijima's Leaf Warbler *Phylloscopus ijimae* at Yokohama Nature Sanctuary.

## はじめに

イイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* はスズメ目ムシクイ科の一種で、夏鳥として伊豆諸島とトカラ列島で繁殖するほか、関東地方以南に迷鳥または稀な渡り鳥として記録される（日本鳥学会 2012）。神奈川県内では過去に逗子市、三浦市、藤沢市江ノ島の3例が報告されている。（日本野鳥の会神奈川支部 2013）。本種は環境省第4次レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に選定されている（環境省 オンライン）。また、国指定天然記念物に指定されている（文化庁 オンライン）。保全上注目されている種であること、県内では数少ない観察例であることから、横浜市での観察記録を下記のとおり報告する。

## 観察記録

【日時】2017年4月9日 8:00～8:30

## 【観察地とその環境】

神奈川県横浜市栄区上郷町 1562-1 横浜自然観察の森（図1）内の生態園（自然観察センター前）。観察地は多摩丘陵から三浦半島に続く丘陵の中央部に位置し、横浜市南部に広がる円海山近郊緑地保全区域の南端にあたる。当地域における極相は照葉樹林（シイタブ林）であるが、大部分は落葉広葉樹の二次林（ヤマザクラ林、コナラ林、ミズキ林、イロハモミジケヤキ林）である（横浜市環境創造局みどりアップ推進課 2013）。

## 【観察内容】

本個体は、生態園内にあるコナラ林の地上3～4メートルほどの位置で「シュリシュリシュリ」と聞こえる声で鳴いていた。「チュウイチュウイチュウイ」と聞こえる別の鳴き方を発することもあった。観察者からの距離を変えながら午前8時から8時半の間、繰り返し鳴き声が聞かれた。「シュリ」または「チュウイ」を1句とした場合、1分間の録音の中では「シュリ（連続3～6句）」が6回、「チュウイ（連続3～4句）」が2回程度の頻度で発せられていた。目視では、スズメより小さくムシクイ科の鳥類と判別できる体形の鳥の姿をわずかに目撃出来たが、色や模様の確認はできなかった。4月10日以降にこれらの鳴き声が聞かれることはなかった。

観察時の天候は、気温 17.7℃、南西の風、風速 3.6メートル程度で、降水量 1.5 ミリ程度の雨が断続的に降っていた。

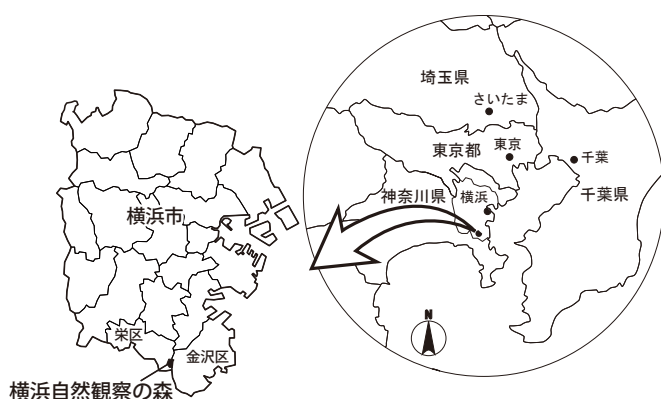


図1 観察地の位置

日本野鳥の会神奈川支部研究年報第24集 BINOS vol.24(2017)より転載。

1: 公益財団法人 日本野鳥の会施設運営支援室 横浜自然観察の森; ohkubo@wbsj.org

キーワード: イイジマムシクイ、横浜自然観察の森、ソナグラム

Key words: Ijima's Leaf Warbler, Yokohama Nature Sanctuary, sonagram

## 【同定方法】

本個体は、外部形態を十分に確認できなかったことから、鳴き声（耳で区別した場合と声紋の表示）によって同定を行った。機材はICレコーダー（Panasonic製 RRXS455）を使用し、記録モードPCM形式44.1kHzの設定で、鳥から約10mの距離から録音を行った。声紋の表示と周波数の計測はCornell Lab of OrnithologyのRaven Lite 2.0.0を用いた。

イイジマムシクイのさえずりは「チョリチョリチョリ」、「チュルリチュルリチュルリ」（高野 2012）、「チュチュチュチュ」、「チュイチュイチュイ」、「チュビチュビチュビチュビ」（叶内ら 2004）といったように表現される。樋口（1973）によれば、イイジマムシクイのさえずりは近縁種のセンダイムシクイやメボソムシクイのそれに似た節回しがあるが、「チュルチュルチュル」と聞こえるさえずりは明らかに区別できると述べている。今回観察した2パターンのさえずりは、主要な繁殖地ある伊豆諸島三宅島では、繁殖期を通し普通に聞かれる鳴き方であり、樋口（1973）で他種と区別できるとしている鳴き方に相当すると判断した。

声紋として表示すると、「シュリ」と聞こえた音声（図2a）は、1句がV字型に表され、鳴き出しが6000～6500Hz、最低周波数が4700～4900Hz、5句連続した音声の長さが1.26秒程度であった。「チュウイ」と聞こえた音声（図2b）は、同じく1句がV字型に

表されるが、V字の左側の傾斜がやや外に開くような形をとっている。鳴き出しが6100～6600Hz、最低周波数が3100～3300Hz、4句連続した音声の長さが1.4秒程度であり、前述の音声より長く、周波数の幅が広い。

2016年5月29日の三宅島で録音したイイジマムシクイのさえずりから、耳で聞いて同じタイプの鳴き方と思われる声紋を表示した（図2c, d）。句のV字の形状や周波数の範囲が概ね一致し、声紋の比較においても、イイジマムシクイと判断して矛盾がないと考えた。

## 考 察

本観察記録は神奈川県で4例目であり、横浜市および横浜自然観察の森園内では初めての記録である。

三宅島における過去10年間の初認は3月23～4月6日の期間である。（大まかな渡来時期は内藤ら（2016）など三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館の年次報告を参照したが、詳細な初認日については同館の未発表データである。）2017年の初認日は4月2日であった（内藤明紀 私信）。イイジマムシクイは越冬地から海上を飛んで静岡県沿岸に到達し、伊豆半島を經由して伊豆諸島へ向かうと推察されている（渡部 2011）。本個体は本州到達後、東進の経路である伊豆半島を通過して神奈川県東部に達したものと考えられた。

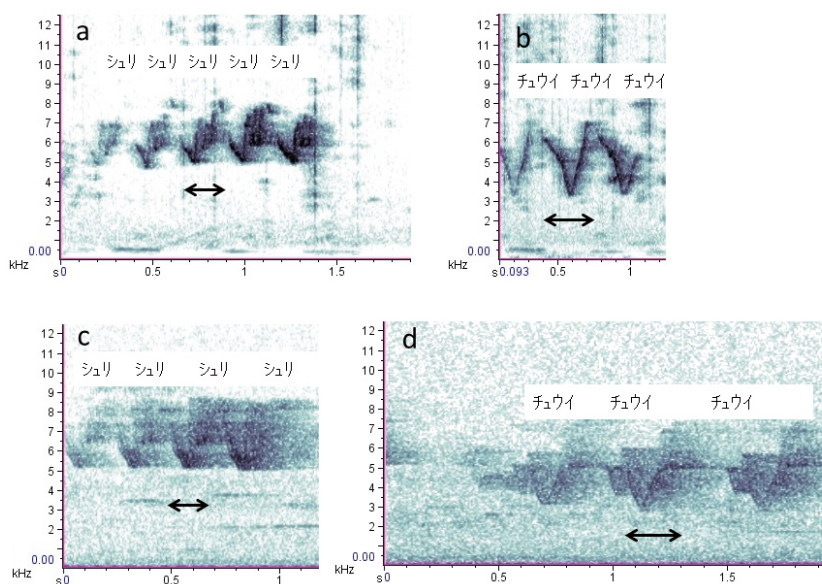


図2 ソナグラム a)、b) 2017年4月9日横浜自然観察の森で録音。  
c)、d) 2016年5月29日東京都三宅島で録音。  
矢印でしめす範囲が1句。

## 謝 辞

執筆にあたり、三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館の内藤明紀氏に初認情報をご提供いただいた。日本野鳥の会施設運営支援室の掛下尚一郎氏、奴賀俊光氏およびBINOS 編集委員の皆様には文章の改善のためのコメントをいただいた。また、我孫子市鳥の博物館の小田谷嘉弥氏には音声データの表示を技術的にサポートいただいた。ここに厚くお礼申し上げる。

## 引用文献

- 文化庁．オンライン．国指定天然記念物データベース  
URL:<http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>  
(2017年4月16日参照)
- 樋口広芳．1973．伊豆諸島の鳥類Ⅱ イイジマムシクイの伊豆半島通過例と伊豆諸島における越冬例．鳥 22: 24-25
- 環境省．オンライン．生物情報収集・提供システムいきものログ  
URL:<https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist>  
(2017年4月16日参照)
- 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄．2004．山溪ハンディ図鑑7 日本の野鳥2版．山と溪谷社．東京
- 気象庁．オンライン．横浜 2017年4月9日1時間ごとの値  
URL:[http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/hourly\\_s1.php?prec\\_no=46&block\\_no=47670&year=2017&month=04&day=9&view=p1](http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/hourly_s1.php?prec_no=46&block_no=47670&year=2017&month=04&day=9&view=p1) (2017年4月16日参照)
- 内藤明紀・大久保香苗・穴原美奈．2016．三宅島の生物季節(2015年4月～2016年3月)．Miyakensis 三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館研究・事業報告．19: 59-69
- 日本鳥学会．2012．日本鳥類目録改訂第7版．日本鳥学会．三田
- 日本野鳥の会神奈川支部．2013．かながわ野鳥ライブラリー8 神奈川の鳥 2006—2010 (神奈川県鳥類目録VI)．日本野鳥の会神奈川支部．横浜市
- 高野伸二．2015．フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂版．日本野鳥の会．東京
- 渡部良樹．2011．イイジマムシクイの渡りの謎に迫る．Birder 25(3): 41
- 横浜市環境創造局みどりアップ推進課．2013．横浜自然観察の森保全管理計画書．横浜市役所．横浜市．

## 2017年の横浜自然観察の森のバッタ目昆虫調査

佐藤和樹<sup>1</sup>

### はじめに

横浜自然観察の森を含む円海山周辺地域では、精力的な昆虫相調査がなされたうえ、その成果は円海山自然調査会(2000)にまとめられているため、昆虫相の解明度が非常に高い地域といえる。さらに、2000年度以後も、チョウ類とトンボ類の調査が継続的に行われており、横浜自然観察の森の調査報告にて毎年度報告されている。

だが、様々な分類群に属する昆虫類の2000年度以降に確認された種が、渡・久保(2012)にまとめられているとはいえ、チョウ類とトンボ類以外の昆虫類の生息状況の網羅的な継続調査は行われていないのが現状である。バッタ目においても、古南(2014)に加え、一般参加者との調査が2012年以降毎年、クツムシ調査が2013年度以降毎年行われているが、いずれも時期や場所、対象種が絞られた調査である。

そこで、今現在の横浜自然観察の森のバッタ目相の全容を把握することを目的に、初夏～秋までを調査時期とし、調査範囲も園内全体としたバッタ目昆虫の生息調査を行った。

### 方法

横浜自然観察の森敷地内を巡回し、目視または鳴き声の聞き取りによって確認された種を記録した。なお、定性的調査を目的としたため、見られた個体数は記録していない。

調査を行ったのは2017年の5月16日の15時45分～17時29分、7月19日の18時05分～19時41分、8月30日の12時21分～14時17分、9月13日の17時00分～19時25分の計4回である。

### 結果

以下の12科33種を確認した。確認した日時は、それぞれ5月16日は5月、7月19日は7月、8月30日は8月、9月13日は9月と省略して表記する。

コロギス科 Gryllacrididae

コバネコロギス *Metriogryllacris magnus*

8月: 自然観察センター前、ヘイケボタルの湿地、ウグイスの草地

9月: モンキチョウの広場

本種は浜口・中原(2004)には記録がなく、近年神奈川県に侵入したと思われる。夜行性だが、昼

---

<sup>1</sup>: 東京都あきる野市

間は葉を糸で綴った巣で休む習性があり、葉で作られた虫の巣を意識すると、昼間でもよく見ることが出来る。5月と7月にも本種と思われる若齢幼虫が見られた。

キリギリス科 Tettigoniidae

ヤブキリ *Tettigonia orientalis*

5月:ピクニック広場

7月:モンキチョウの広場、ノギクの広場、アキアカネの丘

9月:アキアカネの丘

コバネヒメギス *Chizuella bonneti*

7月:モンキチョウの広場、ヘイケボタルの湿地

9月:モンキチョウの広場

クサキリ *Ruspolia lineosa*

9月:ノギクの広場、ゲンジボタルの谷

ハヤシノウマオイ *Hexacentrus hareyamai*

9月:ゲンジボタルの谷

クツワムシ科 Mecopodidae

クツワムシ *Mecopoda niponensis*

9月:ゲンジボタルの谷

ツユムシ科 Phaneropteridae

アシグロツユムシ *Phaneroptera nigroantennata*

8月:モンキチョウの広場

9月:ノギクの広場

セスジツユムシ *Ducetia japonica*

9月:ゲンジボタルの谷、アキアカネの丘

エゾツユムシ *Kuwayamaea sapporensis*

7月:モンキチョウの広場、ゲンジボタルの谷、クヌギの林  
個体数は多く、いたるところで本種の鳴き声が聞かれた。

ヒメクダマキモドキ *Phauluta macilenta*

9月:モンキチョウの広場

大坪(2000)では記録がなく、近年になって横浜自然観察の森に侵入したと思われる。

コオロギ科 Gryllidae

エンマコオロギ *Teleogryllus emma*

9月:アキアカネの丘、ノギクの広場、アキアカネの丘

ハラオカメコオロギ *Loxoblemmus campestris*

9月:ノギクの広場

ツツレサセコオロギ *Velarifictorus micado*

9月:ヘイケボタルの湿地、アキアカネの丘

マツムシ科 Eneopteridae

クチキコオロギ *Duolandrevus ivani*

7月:ノギクの広場、アキアカネの丘

8月:ノギクの広場

9月:ヘイケボタルの湿地、ゲンジボタルの谷

アオマツムシ *Trujalia hibernonis*

9月:モンキチョウの広場、ノギクの広場、ゲンジボタルの谷、アキアカネの丘

カンタン *Oecanthus longicauda*

9月:ゲンジボタルの谷

ヒバリモドキ科 Trigonidiidae

ヤマトヒバリ *Homoeoxipha obliterated*

9月:ヘイケボタルの湿地

カヤヒバリ *Natula pallidula*

5月:アキアカネの丘

7月:アキアカネの丘

アキアカネの丘のススキの茂みに限って確認できた。

クサヒバリ *Svistella bifasciata*

8月:ウグイスの草地



9月:モンキチョウの広場

ヤチスズ *Pteronemobius ohmachi*

9月:クヌギの林

マダラスズ *Dianemobius nigrofasciatus*

9月:モンキチョウの広場

シバズズ *Polionemobius mikado*

9月:クヌギの林、アキアカネの丘

カネタタキ科 Mogoplistidae

カネタタキ *Ornebius kanetataki*

9月:モンキチョウの広場、ヘイケボタルの湿地

ケラ科 Gryllotalpidae

ケラ *Gryllotalpa orientalis*

7月:アキアカネの丘

ヒシバツタ科 Tetrigidae

ハラヒシバツタ *Tetrix japonica*

5月:アキアカネの丘

8月:モンキチョウの広場

9月:モンキチョウの広場

オンブバツタ科 Pyrgomorphidae

オンブバツタ *Atractomorpha lata*

7月:モンキチョウの広場

8月:モンキチョウの広場、ノギクの広場、ウグイスの草地、クヌギの林、アキアカネの丘

9月:モンキチョウの広場

バツタ科 Acrididae

タンザワフキバツタ *Parapodisma tanzawaensis*

8月:ゲンジボタルの谷

ツチイナゴ *Patanga japonica*

8月:モンキチョウの広場

9月:ゲンジボタルの谷

コバネイナゴ *Oxya yezoensis*

7月:モンキチョウの広場

8月:クヌギの林

9月:モンキチョウの広場

ショウリョウバッタ *Acrida cinerea*

5月:モンキチョウの広場

7月:モンキチョウの広場

8月:モンキチョウの広場、ノギクの広場、ウグイスの草地、クヌギの林、アキアカネの丘

9月:モンキチョウの広場

ショウリョウバッタモドキ *Gonista bicolor*

7月:モンキチョウの広場

8月:モンキチョウの広場、ノギクの広場、アキアカネの丘

9月:モンキチョウの広場

クルマバッタモドキ *Oedaleus infernalis*

8月:ノギクの広場

イボバッタ *Trilophidia japonica*

8月:モンキチョウの広場

## 考察

大坪(2000)では確認されていなかったコバネコロギスとヒメクダマキモドキは共に南方系の昆虫であり、南方系昆虫の分布北上が示唆される結果となった。ただしコバネコロギスに関しては、従来神奈川県内では知られていなかったうえに、飛翔できる翅を持たないために分布を広げる能力が高くないと思われる種であるため、貨物に紛れたなど、何らかの要因による移入が疑われる。

また、神奈川県下で確認されている場所の少ないカヤヒバリや、良好なイネ科草本の草地に見られるショウリョウバッタモドキが引き続き確認されたことは、バッタ目昆虫類にとって良好な草地が維持されていると言えるかもしれない。

## 謝辞

横浜自然観察の森友の会に未所属の著者に対し、横浜自然観察の森敷地内での調査を快く承諾して頂いたレンジャーの皆様に、厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

- 円海山自然調査会. 2000. 円海山地域の昆虫. 神奈川虫報, (130):458pp.
- 浜口哲一・中原直子. 2004. バッタ目 Orthoptera. 神奈川県昆虫誌 I :139-188.
- 古南幸弘. 2014. 桜森のバッタ目調査(2013年度). 横浜自然観察の森調査報告, (19):60-61.
- 大坪広. 2000. バッタ目. 『円海山地域の昆虫』神奈川虫報, (130):52-56.
- 渡弘・久保浩一. 2012. 2000年以降に横浜自然観察の森で確認された昆虫について. 横浜自然観察の森調査報告, (18):14-26.



# 調査記録

鳥類の冬なわばり数(2017 年度)			
奴賀俊光(公益財団法人 日本野鳥の会)まとめ ボランティア・レンジャーなど職員			
調査場所	横浜自然観察の森園内全域		
調査日	2017 年 9 月～2018 年 3 月		
調査開始	1998 年	次年度 継続	終了予定 ー 年
<b>調査目的</b> 鳥類の種組成や個体数を指標として環境の変化をモニタリングする。			
<b>調査方法</b> 秋～冬になわばりを作るモズ、ジョウビタキ、ルリビタキ3種について、横浜自然観察の森友の会ボランティア、来園者に呼びかけて、目視により確認された位置を自然観察センター内に掲示した地図に種ごとにシールを貼ってもらって記録した。これを種ごとに集計し、なわばり数を推定した。本調査は、1998 年から継続して行っている。			
<b>調査結果</b> 園になわばりを作っていたのは、モズは、メス 2-3 羽(オス 0 羽)であると推定された。ジョウビタキは、メス 2-3 羽であると推定された。ルリビタキは、メス 2 羽であると推定された(表 1)。			
<b>表1. 秋冬なわばり数の推定結果数</b>			
種名/雌雄	オス	メス	合計
モズ	0(0)	2-3(1-2)	2-3(1-2)
ジョウビタキ	0(1-2)	2-3(0-2)	2-3(1-4)
ルリビタキ	0(1)	2(1-3)	2(2-3)
※カッコ内は2016年度の結果			
今年度はモズ、ジョウビタキ、ルリビタキの 3 種類において、オスの定着個体は見られなかった。モズは観察センター前とノギクの広場に縄張りがあった。10 月にアキアカネの丘(上・下)、ピクニック広場などでメス 1 回、不明 3 回の記録があったが定着していたかは不明である。ジョウビタキのメスはモンキチョウの広場周辺とピクニック広場に縄張りがあった。2016 年度にピクニック広場の工事が終わったことで草地環境の面積			

が広くなったため、ジョウビタキの好適環境が創出され定着したと考えられる。ルリビタキはミズキの道⑬周辺に縄張りがあったと考えられるが、それ以外の観察記録はまばらであり、2-3箇所縄張りがあった昨年と比較すると縄張り数は少なかった。

鳥類ラインセンサス(2017 年度)				
奴賀俊光・掛下尚一郎(公益財団法人 日本野鳥の会)				
調査場所	横浜自然観察の森園内全域			
調査日	2017 年 4・5・6・10 月、2018 年 1・2・3 月の各月 2 回の計 14 回			
調査開始	1986 年	次年度	継続	終了予定 一年
<b>調査目的</b>				
鳥類の種組成や個体数を指標として環境の変化をモニタリングする。				
<b>調査方法</b>				
繁殖期(4・5・6 月)・秋の渡り期(10 月)・越冬期(1・2 月)・春の渡り期(3 月)の時期に、月 2 回(上旬・下旬)、約 2.3km のコースを時速約 2km で歩きながら、道の片側 50 m ずつ、両側 100m の範囲内で確認された鳥類の種名と個体数を記録した。本調査は、1986 年から継続して行っている。				
<b>調査結果</b>				
2017 年度の調査では 43 種(外来種のコジュケイ、ガビチョウの 2 種を含む)の鳥類が確認された(生物リスト表 1)。種の配列は日本鳥類目録改訂第 7 版(日本鳥学会 2012)に従った。				
月ごとの平均個体数{(上旬に確認された個体数+下旬に確認された個体数)/2}を比較すると、最も多かったのは 4 月であった。年間を通して個体数が多かった種は多い順にヒヨドリ、メジロ、ウグイス、ガビチョウ、シジュウカラであった(表 2)。これらは、昨年と順位は異なるが、構成種は同じだった。ヒヨドリとウグイスは 4 月、メジロは 6 月、ガビチョウは 7 月、シジュウカラは 4 月と 3 月にそれぞれ最も多い個体数が記録された。				
繁殖期に個体数の上位 5 種を占めたのは、多い順にメジロ、ウグイス、ヒヨドリ、ガビチョウ、シジュウカラであった(表 2)。前年度に比べメジロとウグイスが増加し、ヒヨドリ、ウグイス、ガビチョウ、シジュウカラはあまり変わらなかった(掛下・藤村 2017)。越冬期についてみると、ヒヨドリ、アオジ、メジロ、エナガの順であった。平均個体数ではヒヨドリが大幅に増加し、メジロ、エナガが増加した一方でシジュウカラ、シメが減少した。				
スズメは全国的な減少傾向が報告されており、2010 年度以降、園内のスズメの減少が示唆されている。2017 年度はこれまでで 1 番低い数値であったが、2008 年以降は年ごとに大きく変動しており(表 3)、今後も引き続き推移を注視すべきと思われる。				



表 2. 鳥類ラインセンサス調査における平均個体数の順位(多い順)

繁殖期(4-6月)

順位	種名	平均個体数
1	メジロ	22.0
2	ウグイス	16.7
3	ヒヨドリ	14.2
4	ガビチョウ	9.8
5	シジュウカラ	6.3
6	ハシブトガラス	5.7
7	ヤマガラ	4.8
8	コジュケイ	4.3
9	コゲラ	4.2
10	エナガ	3.7
11	大型ツグミ類	2.5
12	アオジ	2.2
13	ヤブサメ	2.0
14	シメ	1.8
15	キジバト	1.7
16	アオゲラ	1.3
17	センダイムシクイ	0.8
18	クロジ	0.8
19	ハシボソガラス	0.7
20	シロハラ	0.7
21	アカハラ	0.7
22	ツグミ	0.7
23	キビタキ	0.7
24	アトリ	0.7
25	ツバメ	0.5
26	トビ	0.3
27	スズメ	0.3
28	カワラヒワ	0.3
29	サンショウクイ	0.3
30	ホトトギス	0.2
31	カワセミ	0.2
32	オオルリ	0.2
33	サシバ	0.2
34	エゾムシクイ	0.2

越冬期(1-2月)

順位	種名	平均個体数
1	ヒヨドリ	27.0
2	アオジ	8.8
3	メジロ	7.8
4	エナガ	4.3
5	コゲラ	3.3
6	シジュウカラ	3.3
7	ハシブトガラス	2.8
8	シメ	2.8
9	クロジ	2.8
10	ガビチョウ	2.5
11	ウグイス	2.0
12	ヤマガラ	1.8
13	ウソ	1.5
14	コジュケイ	1.0
15	大型ツグミ類	1.0
16	シロハラ	0.8
17	カワラヒワ	0.8
18	アオゲラ	0.5
19	ツグミ	0.5
20	ホオジロ	0.5
21	キジバト	0.3
22	トビ	0.3
23	キセキレイ	0.3
24	ミサゴ	0.3
25	オオタカ	0.3

年間

順位	種名	平均個体数	留鳥
1	ヒヨドリ	21.2	●
2	メジロ	15.9	●
3	ウグイス	10.1	●
4	ガビチョウ	7.0	●
5	シジュウカラ	5.9	●
6	ハシブトガラス	5.1	●
7	アオジ	4.3	
8	エナガ	4.0	●
9	ヤマガラ	3.5	●
10	コゲラ	3.4	●
11	コジュケイ	2.9	●
12	シメ	2.2	
13	大型ツグミ類	1.6	
14	クロジ	1.5	
15	キジバト	0.9	●
16	アオゲラ	0.9	●
17	ヤブサメ	0.9	
18	シロハラ	0.5	
19	カワラヒワ	0.5	●
20	ツグミ	0.4	
21	ウソ	0.4	
22	トビ	0.4	●
23	ハシボソガラス	0.4	●
24	センダイムシクイ	0.4	
25	キビタキ	0.4	
26	アカハラ	0.3	
27	アトリ	0.3	
28	ホオジロ	0.2	●
29	ツバメ	0.2	
30	キセキレイ	0.2	
31	カワセミ	0.1	●
32	スズメ	0.1	●
33	サンショウクイ	0.1	
34	カルガモ	0.1	●
35	ホトトギス	0.1	
36	モズ	0.1	
37	オオルリ	0.1	
38	ハクセキレイ	0.1	●
39	サシバ	0.1	
40	エゾムシクイ	0.1	
41	トラツグミ	0.1	
42	マミチャジナイ	0.1	
43	ミサゴ	0.1	
44	オオタカ	0.1	

表 3. スズメの平均確認個体数の推移(2004～2017 年度)

年度\月	4月	5月	6月	10月	1月	2月	3月	年度 平均値(羽)
2004	2.0	14.5	27.5	1.0		1.0	2.0	6.9
2005		31.5	12.0	0.5		1.0		6.4
2006	4.5	22.0	14.5	1.0	1.0	8.0	3.0	7.7
2007	0.5	7.0	26.0	1.0			2.5	5.3
2008		4.0	1.0				1.5	0.9
2009		9.0	7.5	10.0	0.5	1.5	3.0	4.5
2010		0.5	1.5			1.5	1.5	0.7
2011	1.0	1.0	3.0				1.5	0.9
2012		10.5	6.0			0.5	1.0	2.6
2013	1.5	44.0	25.5	2.5	1.0	1.5		10.9
2014	2.5	16.0	11.0		0.5	0.5	1.0	4.5
2015	1.0	16.0	7.5	0.5	0.5		2.0	3.9
2016		11.5	9.0					2.9
2017			1.0					0.1

参考・引用した本・文献

日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.

掛下尚一郎・藤村啓. 2017. 鳥類ラインセンサス(2016 年度). 横浜自然観察の森調査報告 22: 21-22.

<b>月別鳥類出現率記録調査(2017年度)</b>			
奴賀俊光・掛下尚一郎(公益財団法人 日本野鳥の会) ボランティア・レンジャーなど職員			
<b>調査場所</b>	横浜自然観察の森園内全域		
<b>調査日</b>	2017年4月1日～2018年3月31日(休館日を除く)		
<b>調査開始</b>	1986年	<b>次年度</b>	継続
		<b>終了予定</b>	— 年
<b>調査目的</b>			
鳥類の種組成を指標として、環境の変化をモニタリングするためには、月2回のラインセンサス法だけでは、記録できない種があるため、補充調査としておこなった。また、季節の生物情報として、一部の情報をカード化して展示した。			
<b>調査方法</b>			
休館日以外の毎日、レンジャーと横浜自然観察の森友の会会員等のボランティアにより園内で確認された鳥類の種名を1日ごとに記録した。本調査は、ラインセンサスだけでは記録できない種があるため、1986年からラインセンサスの補充調査として行っている。観察場所には関谷奥見晴台を含んでいる。			
<b>調査結果</b>			
得られた記録を集計し、月別に出現率をまとめた(生物リスト表2)。種の配列は日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会 2012)に従った。(休館日である毎週月曜日、月曜が祝日である場合は翌日、年末年始の12月28日から1月4日の記録は含めていない。)			
2017年度に確認できた鳥類の種数は100種(うち外来種4種)であり、前年度の93種(うち外来種4種)と比べると7種増加した。今年度確認された種について、年間出現率(12ヶ月の出現率の合計/12)の増減を比較すると、全100種中57種で増加傾向を示した(生物リスト表2の年間出現率に★をつけた種が増加傾向にあると考えられる種である)。			
2017年度は、新たに次の4種が横浜自然観察の森のレンジャーや友の会会員により記録された。			
ヨシゴイ(サギ科) 観察日 2017年10月24日			

オオバン(クイナ科) 観察日 2017年10月24日

アカハラダカ(タカ科) 観察日 2017年9月14日

イイジマムシクイ(ムシクイ科) 観察日 2017年4月9日

イイジマムシクイの観察記録は、以下の日本野鳥の会神奈川支部研究年報にて報告した。

大久保香苗. 2017. 横浜自然観察の森におけるイイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* の観察記録. BINOS 24: 55-57.

#### 参考・引用した本・文献

日本鳥学会. 2012. 日本産鳥類目録 改訂第7版. 438p, 日本鳥学会, 三田.

鳥類標識調査(2017 年度)																																																																																																																																																																																																																																																											
清水 武彦(横浜自然観察の森友の会) 他 下記調査協力員																																																																																																																																																																																																																																																											
調査場所 横浜自然観察の森 (観察センター脇の雑木林:生態園)																																																																																																																																																																																																																																																											
調査日 2017 年 11 月 25 日～2018 年 3 月 17 日																																																																																																																																																																																																																																																											
調査開始 2006 年                      次年度 継続                      終了予定                      一 年																																																																																																																																																																																																																																																											
<p><b>調査目的</b></p> <p>横浜自然観察の森内における鳥類生態(中継・越冬・居住等)の把握。</p> <p><b>調査方法</b></p> <p>かすみ網を使用して鳥類を回収し、足環装着/確認・測定・記録後に放鳥。                      (山階鳥類研究所認定の鳥類標識調査員が環境省の許可に基づき実施。)                      8:00-15:00 の間、45～60 分毎に回収・記録・放鳥を実施。</p> <p><b>調査結果</b></p> <p>11 月から延 8 日調査:8 種 27 羽を放鳥。表 1 に放鳥結果を示す。                      放鳥種・数とも減少。調査開始からの累計が 27 種 7892 羽となった。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 1. 17 年度放鳥結果(種名は回収順。上段:新放鳥、下段:再放鳥)</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>年</th> <th>17</th> <th></th> <th></th> <th></th> <th>18</th> <th></th> <th></th> <th></th> <th></th> <th>計</th> </tr> <tr> <th>月</th> <td>11</td> <td>12</td> <td>12</td> <td>12</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>3</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <th>日</th> <td>25</td> <td>16</td> <td>22</td> <td>27</td> <td>20</td> <td>24</td> <td>4</td> <td>17</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <th>天気/種名</th> <td>晴</td> <td>晴</td> <td>曇</td> <td>晴</td> <td>曇</td> <td>晴</td> <td>晴</td> <td>晴</td> <td></td> <td></td> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>メシロ</td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>4</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>ウグイス</td> <td></td> <td>2</td> <td>3</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>5</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>2</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>アオシ</td> <td></td> <td>2</td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>3</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>ガビチョウ</td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>シロハラ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>ヒヨドリ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td>2</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>エナガ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>2</td> <td>2</td> <td></td> <td>4</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>シジュウカラ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>1</td> <td>6</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>3</td> <td></td> <td>21</td> </tr> <tr> <td></td> <td>0</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td>6</td> </tr> </tbody> </table> <p>調査協力員：掛下 尚一郎他観察の森レンジャー</p>										年	17				18					計	月	11	12	12	12	1	2	3	3			日	25	16	22	27	20	24	4	17			天気/種名	晴	晴	曇	晴	曇	晴	晴	晴			メシロ	1	1		1	1					4											0	ウグイス		2	3							5			1		2			1			4	アオシ		2		1						3											0	ガビチョウ		1								1											0	シロハラ				1						1									1		1	ヒヨドリ				1			1			2							1				1	エナガ							2	2		4											0	シジュウカラ								1		1											0	計	1	6	3	4	1	0	3	3		21		0	1	0	2	0	1	1	1		6
年	17				18					計																																																																																																																																																																																																																																																	
月	11	12	12	12	1	2	3	3																																																																																																																																																																																																																																																			
日	25	16	22	27	20	24	4	17																																																																																																																																																																																																																																																			
天気/種名	晴	晴	曇	晴	曇	晴	晴	晴																																																																																																																																																																																																																																																			
メシロ	1	1		1	1					4																																																																																																																																																																																																																																																	
										0																																																																																																																																																																																																																																																	
ウグイス		2	3							5																																																																																																																																																																																																																																																	
		1		2			1			4																																																																																																																																																																																																																																																	
アオシ		2		1						3																																																																																																																																																																																																																																																	
										0																																																																																																																																																																																																																																																	
ガビチョウ		1								1																																																																																																																																																																																																																																																	
										0																																																																																																																																																																																																																																																	
シロハラ				1						1																																																																																																																																																																																																																																																	
								1		1																																																																																																																																																																																																																																																	
ヒヨドリ				1			1			2																																																																																																																																																																																																																																																	
						1				1																																																																																																																																																																																																																																																	
エナガ							2	2		4																																																																																																																																																																																																																																																	
										0																																																																																																																																																																																																																																																	
シジュウカラ								1		1																																																																																																																																																																																																																																																	
										0																																																																																																																																																																																																																																																	
計	1	6	3	4	1	0	3	3		21																																																																																																																																																																																																																																																	
	0	1	0	2	0	1	1	1		6																																																																																																																																																																																																																																																	

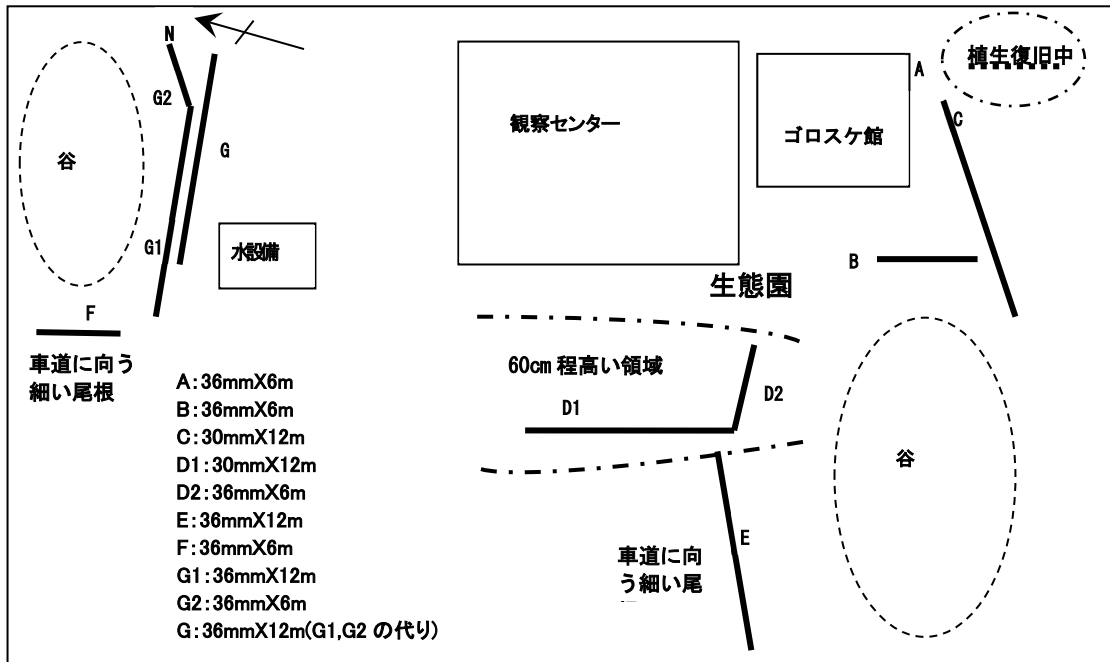
- (1) 17年は雨天、18年は降雪と極寒の影響で調査日数・時間が減り捕獲数が減少。ウグイスの捕獲が多かった。シロハラ等ツグミの捕獲数が激減したまま。
- (2) 再捕獲は2種6羽と減少。1シーズン以上前の個体の再捕獲(Rt)はウグイス♀A(343日)の1種。

#### 所感

今年度も雑木林の樹木について移入種伐採と元の種への変更を進めている過程であり、植生復旧に伴う周辺環境変化を見ながら調査を継続していきたい。

参考データ：調査場所(網位置概略)と

放鳥結果(代表 3 種:メジロ、ウグイス、シジュウカラ)



種類	網	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17
メジロ	A	3	4	0	15	3	2	休	休	休	休	休	休
	B	1	休	休	6	1	2	2	1	4	0	1	休
	C	29	12	8	33	7	7	21	12	23	4	7	2
	D1	—	23	14	29	19	休	5	0	8	0	2	0
	D2	—	—	2	2	0	休	0	1	0	0	0	1
	E	—	—	—	—	1	休	0	0	1	0	0	休
	F	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	休
	G1	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	2	休
	G2	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	2	休
	G	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウグイス	A	1	5	2	7	2	2	休	休	休	休	休	休
	B	2	休	休	3	0	0	0	2	2	2	2	休
	C	4	10	6	6	10	4	3	4	4	6	2	7
	D1	—	6	4	0	4	休	1	0	1	1	3	2
	D2	—	—	1	0	0	休	0	0	0	0	0	0
	E	—	—	—	—	0	休	0	0	0	0	0	休
	F	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	1	休
	G1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0	2	休
	G2	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	1	休
	G	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シジュウカラ	A	0	1	2	1	1	0	休	休	休	休	休	休
	B	0	休	休	0	0	0	0	0	3	1	0	休
	C	3	6	4	1	3	2	3	0	2	0	0	0
	D1	—	8	11	2	3	休	0	0	0	4	2	1
	D2	—	—	4	3	0	休	0	1	0	1	2	0
	E	—	—	—	—	1	休	1	2	2	0	0	休
	F	—	—	—	—	—	—	—	—	0	1	1	休
	G1	—	—	—	—	—	—	—	—	0	1	0	休
	G2	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	休
	G	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—